周辺からの記憶 19

2015 年夏の福島

村本邦子（立命館大学）

2018 年 3 月 5～9 日、ハルビンに行った。731 部隊の博物館の展示を見ながら、部隊の成り立ちそのものがまったく現代日本社会そのものを表していることを痛感した。悪の全体像は徹底的なビューロクラシーによって分割されているため、個々のユニットで行われている課題に専念している限り、自分は科学を通じて人類の未来に貢献しているのだという幻想を持つことが可能になる。本当にそうなのか疑問は残るが、与えられたものをそのまま受け入れ、真面目に努力する優等生が一番そこにはまるのだと思った。1990 年代、薬害エイズのルーツが 731 部隊にあることが明らかになった時の衝撃は、今も忘れられない。人命より経済を優先する価値観は改められることなく、そのまま原発政策にもつながり、今回の事故（事件？）に結びついたものだ。

3 月 8 日、日帰りだったが、満州（中国ではこれを「欺満国」と呼ぶ。まったくだ）の首都新京（現在の長春）にも行った。4 月には満蒙開拓青少年義勇団として 14 歳で満州に行った藤後博巳さんの話をお聞きしたり、舞鶴にリニューアルオープンした引揚げ記念館にも行ったりした。今や満州は、私にとって、遠い過去の幻などではなく、実体ある現実として存在する。

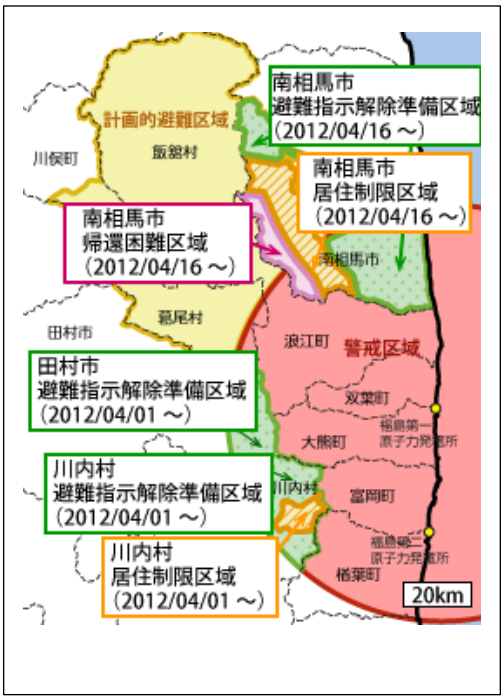
今回の記録は、2015 年夏の福島フィールドワークのものである。私の中では、すべてが不気味に固く結びついている。

2015 年 8 月 24 日

＜福島から飯館村へ＞

毎年、むつでのプロジェクトの前、夏休みを利用して、フィールドワークを行っている。今年は、フリージャーナリスト藍原寛子さんに福島を案内してもらうことになった。福島駅で落ち合い、藍原さんの車で国道 114 号線を走り、飯館村に向かう。

国は、ちょうど、2015 年 6 月に、「帰還困難区域を除いた」区域の避難指示を 2017 年 3 月までに解除するという方針を出したところだ。



避難区域の状況（2012 年 4 月 1 日）出典：経済産業

○:立ち入り等可　△: 条件付き（注 参照）　X:不可

放射線量から見た各区域の考え方	物理的な防護措置による立入制限の有無	立入り等				
		主要道路における通過交通	住民の方の一時的な滞在	公益を目的とした立入り	区域内で認められる立入り等に付随する又は準じる作業の実施のための立入り	区域内での宿泊
帰還困難区域 事故後6年間を経過してもなお、空間線量率から推定された年間積算線量が20ミリシーベルトを下回らないおそれのある地域(2012年3月時点での推定年間積算線量が50ミリシーベルト超の地域)	有	△ (注1，注2)	△ (注1)	△ (注1)	△ (注1)	×
居住制限区域 空間線量率から推定された年間積算線量(2012年3月時点)が20ミリシーベルトを超えるおそれがあると確認された地域	無	○	○	○	○	△ (注3)
避難指示解除準備区域 空間線量率から推定された年間積算線量(2012年3月時点)が20ミリシーベルト以下となることが確実であることが確認された地域	無	○	○	○	○	△ (注3)

三区域すべてにおいて引き続き避難指示が出されており、**帰還困難区域**においては、物理的な防護措置（バリケード）により立入りを制限しています。
居住制限区域、**避難指示解除準備区域**については、日中の立入りに制限はありませんが、**関係者以外の立入り**は控えてもらうようお願いしています。

(注1) 市町村長が通行証を発行した場合等に、実施可能です。
(注2) 一部の主要幹線道路については、通行証の確認が不要で通行可能です。
(注3) **特例宿泊**や**準備宿泊**等、例外的に宿泊を可能とする制度があります。

避難指示区域内における主な活動について　　（2015 年 6 月 19 日時点）

出典：福島復興ステーション HP

福島市から少し走ると、渡利地区（福島市）に入る。福島第一原発からおよそ60km。北西に流れた放射線が山を伝って流れ込み、窪地になった道路沿いに放射線の雲ができてホットスポットとなった。事故から3ヶ月後、政府の原子力災害対策本部は、20km圏外で年間積算線量が20mSvを超えると推定される地点を「特定避難勧奨地点」に指定する方針を出し、南相馬市、伊達市、川内村の約260地点が設定されたが、同じように線量が高かった渡利地区は見送られた。

明確な理由は示されず、住民たちは、「渡利地区は人口約28万人の福島市のほぼ中心部にある。渡利小から県庁は阿武隈川の対岸にあり、約1キロしか離れていない。JR福島駅へも2キロほど。花の名所の花見山、弁天山などもあり、季節には県外からの観光客でにぎわう。そんな地区が汚染状態にあることは、国や県にとって、できれば伏せておきたい不都合な真実だったのではないか」という疑念を抱いているとのこと（東京新聞TOKYO Web, 2015年7月28日；www.tokyo-np.co.jp/article/feature/tohokujisin/fukushima_report/list/CK2015072802000164.html）。

県や市の除染作業は進まず、住民たち自身が自宅周囲の表土を削ったそうだ。上から下りてきた指示は「汚染土は各家で保管せよ」で、事故から4年経た今も、除染土は庭にある。7月には、除染モデル地区として、自治会総動員で除染を行ったものの、雨が降ると、再び線量があがる状況が続いている。事故前は約17,000人だった地区人口は、1,260人ほど減った。母子で避難するケースが多いそうだ。

車の中ではあるが、線量計で測定してみると、この時は0.14μSv/hだった。あちこち除染中である。

福島市飯野町（いいのまち）地区を通ると「UFO の里」の看板がある。昔から UFO が出ると言われ、UFO で町興しをしているそうだ。

それから川俣へと入っていく。ここには「コスキンの町」の看板がかかっている。コスキンとはアルゼンチンにある町の名前で、毎年、中南米の音楽祭が開かれており、1975 年から川俣町でもアンデス山脈に住む先住民のフォルクローレの全日本フェスティバルが開かれているという。

川俣町は、大阪府寝屋川市で中学一年生男女の遺体が見つかり、逮捕された容疑者が除染作業員として働いていたということで、今まさにマスコミをにぎわしているところだ。今回のフィールドワークでは、地元の方からたびたびこの話題が出た。実は、この日、川俣町議会は、住民に大きな不安と恐怖を与えたとして、除染作業を中止する要望書を国に提出している。複合的な問題が入り組んで含まれている微妙な問題だ。

川俣町には「きつつきの会」というのがあって、飯館村のサロンになっている。飯館村の小学校は現在３校あるが、この地域に避難していて校舎がある。福島市から通っている子どもたちも結構いる。みんなバラバラに避難していて、朝夕、あちこちから車が来るし、スクールバスも３つか４つのルートあるそうだ。

飯館村は川俣町と隣接しており、東の端は南相馬に隣接している。藍原さんによれば、山が多く、もともと田畑はなく、昭和の初め、開墾者が入植して、畑地が広がったところだそうだ。元は南相馬と同じ相馬中村藩で、藩主は賢者と言われ、このあたりはやませで作物も育たないので、馬を育てよと言って牧場ができた。馬は移動の手段にもなるし、食べられる。皮も使えるし、季節に関係なく売れる。馬や牛、畜産酪農をせよということで、牧場がたくさんあった。

そうこうするうちに飯館村に入る。誰も住んでいないが、原発地区との通行路になっているので、関連の車や人も多い。

ずっと田畑だったところに、今は、除染土の入った黒い袋を２段３段重ねて上に緑のカバーをかぶせてある。以前は黒だけで圧迫感あったが、緑のカバーがあると少しまし。村の中のものだけをここで処理することになっている。線量の低いものを外側に。煙突のように見えるのが、放射線の熱を逃がすもの。筒から間違いなく放射線が出ている。

チェルノブイリの時、植物、菜の花か何かが放射線を吸い込むというので、ひまわりでやってみたそうだが、効果なしの結論になって採用されなかったとのこと。日中は帰ってくる人もいるし、お盆には許可がでるが、夜はパトロール地域となるということ。

＜細川牧場を訪ねて＞

細川牧場の大きな看板には「花塚ボランティア」の文字、標識には「若者には夢と希望を　老人には愛の手を」と書かれている。細川さん宅は新しく見えるきれいなグリーンのペンキで塗られている。トラックの文字もグリーンだ。庭にはかわいいポニーがつながれている。

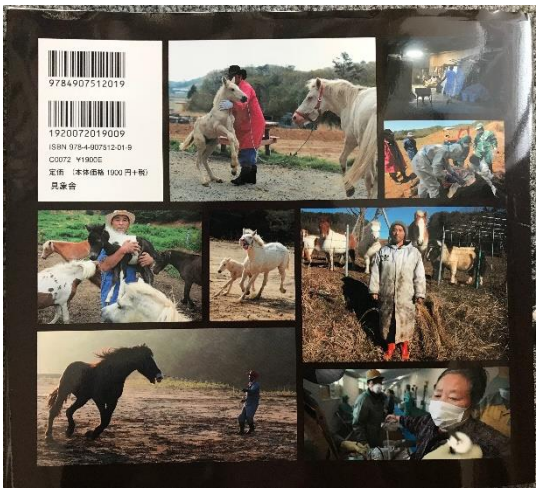
細川牧場の主、細川徳栄さんは畜産農家の三代目。競馬の馬の生産者で、中央競馬の馬主の検索をすると、細川さんの名前が出てくる。暴れん坊将軍の白い馬も細川さんのところで生まれた馬だそうだ。相馬野馬追など祭りや時代劇などに貸し出すために、馬を育て、調教してきた。小学校、養護学校、盲学校などに馬を貸し出すボランティアもしてきたという。家族のような馬や牛を見捨てることはできないと、全村避難を求められるなか、避難区域に残され

た牛や馬 470 頭を助け出し、世話をしてきた。

細川さんは、一見飄々と、眼をキョロキョロさせながら、細川牧場を撮った写真集やビデオを見せてくれた。時々、「可哀そう」「これ涙流れるやつだ」「放射能ですべてが狂った」「悲しい本だ」などという言葉がボソボソッと口から洩れ出る。

DVD「細川牧場さゆり」は、香取直孝さんが 2013 年に作ったもの。馬が突然倒れ、痙攣を起こして、なす術もなく 1 週間ほど苦しんで死んでいくという映像は、あまりにショッキングだ。ましてや手塩にかけて育てた馬であれば、胸もはりさけんばかりだろう。3.11 以来、すでに 26 頭も亡くなった。東北大の先生が解剖したが、原因はわからないと言われたそうだ。

「全部放射能のせい。ここが一番高いの、村で。木枯れてるでしょ。おかしいでしょ。調べたら、山際の方が高いんだわ。だんだん目に見えてきたっていうのか。風が少ないから集まる。そして、馬に直接あたる。放射線量 4.25。まず、渡り鳥が来なくなった。あとね、蝶々やいなごも奇形が生まれた。燕も来なくなった。何か異変が起きてるね」と細川さん。



細川さんは、震災の後、二人の人間を助けたそうだ。原発が爆発した後の 3 月 26 日は雪が降ったが、一人の妊婦が氷ですべって転び、気を失った。予定日を 1 週間後に控え、避難先から家族の着替えを取りに

戻ってきていた。胎盤が切れたのか、ブツッと音がして、気を失ったそうだ。そこら中真っ赤になって、犬が吠えていた。

細川さんが通りかかったときには、時間も経って冷たくなっていた。誰もいない、救急車もないなか、自分の車に乗せて、病院へ向かったが、車の中で赤ちゃんが生まれてしまった。牛馬の出産には慣れていたが、人間は初めてで、臍の緒を切った時には震えたという。

病院へ急いでいると、スピード違反でパトカーに止められ、事情を話してパトカーに乗せてもらった。雪山の遭難と同じで、眠るとだめだと言うので、お母さんを温め、叩いて起こすと、ちょっと眼が開いて、「この子だけは助けて」とつぶやいて、また眠ってしまう。「いったいこの子を誰が育てるんだ」と必死に呼びかけた。

結果、母子ともに助かり、今は子どもも大きくなって、そこら中跳ね回って人一倍元気なのだそうだ。細川さんがいてくれて、本当に良かったと胸をなでおろした。

「多いときは年間 60 頭もお産をしてきた。農家の貧乏育ちだけれども、馬を育て、教育して生きてきた。それを原発爆発したからって、家族のような馬を捨てて、自分だけ逃げるなんてできなかった。原発事故の恐ろしさは誰もわかんねえ。でも、馬をこうやってね、こういう馬を捨てていくってことはできないよな」

「国や県は、そんなに困ってるんなら、注射 1 本で簡単にできるからって言ってきた。家族同様の馬にそんなことできっか。この国も狂ってるけど、お前たちも狂ってるぞ。あんたらは犯罪人だって言ってやった。そしたら誰も来ないよ。ここに住んでても」

「原発前は 6 千人の人口だけど、広々とした自然の中でやっていた。そういう和やかな村で馬を育ててきて、捨てていくなんてことできない。注射一本で殺したでしょ。馬鹿げたこと。死んだら命は戻ってこない。お金は働けば戻ってくる。お金より命だ」

「死んだ馬は帰ってこない。せめて保証して欲しい。このままでは馬にも申し訳ないよ」。

子牛は 70 万円程度で、馬は牛の 3 倍するが、馬 1 頭 20 万と言ってきたそうだ。20 万円というのは豚の値段。現在、裁判で闘争中。東電に雇われている弁護士に、「真面目にやれよ。弁護士なんだから、間違ってること正しいって言う弁護士いるかと厳しく言った。あくまでも我々は被害者なんだから。すべてが狂っちゃったよ。」

牧場の方も見せてもらった。細川さんが近づいて声をかけると、馬たちがあちこちから集まってくる。原発事故前からずっと、こうやって細川さんは馬たちにえさをやり続けてきたのだ。馬たちはそれをちゃんと知っていて、細川さんを信頼し、慕っている。美しい馬たちだ。馬を「教育」してきたという細川さんの言葉に、ひとりひとり名前と人格を持つ馬との関係が感じられる。それはもうどんなにか愛おしいことだろう。「すべてが狂っちゃったよ」という言葉が頭の中で鳴り響く。むごい。

この日の夜は、福島市の南西部、JR 福島駅から車で 40 分ほどのところにある土湯温泉に泊まった。

2015 年 8 月 25 日

＜(株)元気アップつちゆ＞

翌朝、また藍原さんと落ち合い、「(株)元気アップつちゆ」を訪ね、代表取締役の加藤勝一さんにお話を伺った。

東日本大震災で土湯も大きな被害を受け、震災前に 16 軒あった旅館のうち 7 軒が休廃業し、残ったのは 9 軒。「このままいったら土湯はどうなるんだろう」と惨憺たる思いだったそうである。

線量が低かったため、体育館に千人ぐらいが避難してきて、1 ヶ月半すると二次避難ということで、残った 9 軒の旅館が避難者を受け入れた。飯館や浪江などから来ていて、多いときは 800 人くらい。

土湯の小学校には子どもが 12 人しかおらず、長らく子どもの声を聞かなかったが、避難者は家族連れなので、子どもたちの声が温泉街に響き渡った。小中学校はバスで福島市内に行っていたが、それだけでも気持ちが安らいだ。

8 月になると借り上げ、仮設住宅に三次避難、8 月末をもってみんな温泉街から移っていき、土湯は、また、もぬけの殻になった。何とも言えない状態になって、一段と危機感が募り、何とか土湯を再生させなければと、2012 年 10 月に 29 名の有志で組織を作った。

新たな街づくりを進めていくには核と

なるものがいるから、温泉、河川、砂防、地域の資源に着目して、再生可能エネルギーの街づくりを目指すことにした。国土交通省の街づくり計画で、2015 年から 2019 年の 5 年で 21 億 5 千万、駐車場の整備、水力発電、バイナリー発電に取り組んだ。

今や全国から再生可能エネルギーの視察研修が増え、こけしブームでもある。春にこけし祭りがあって、今年は例年になく人出が多く、16%の伸び。震災前は泊り客だけで 23 万人くらいだったが、震災の年、7 万人に減り、昨年は 18 万人。最終的に 5 軒が廃業し、16 軒の 23 万人と 11 軒の 18 万なので、震災前の状況に戻っている。

加藤さんは、1948 年生まれ、もともと土湯の出身で、旅館をしていたこともあり、社会福祉法人を作って福祉にも携わってきた。温泉街に地域密着型のケアハウスを作り、それを生業にしていた。

20 代の頃、「あらふどの会」という青年団を結成していた。このあたりでは、雪が降ると、雪をかき分けたり踏み固めたりして道をつけなければならないが、それを「あらふどこぐ」と言う。1971 年オイルショックの時代、あの時もダメージが大きく、それまでは黙っていても観光が成り立ち、どこも潤っていたが、これからの観光は左うちわではいかないと考え、24 歳の時に、「あらふどこぐぞ。みんなついてこい」と、十年会長を務めた。

3.11 を受けて、地域を何とかしなければ

と、当時のメンバーに声をかけて、今回の協議会結成となった。「もう一回出番かな」とそんな思いで5年になる。そういう動きが功を奏して、行政も動いてくれた。こちらがある程度方向づけして行政を動かすことが重要だという。

エネルギー源については十分に理解できていないが、現物を見せてもらった。説明資料には英語も入っていて、世界各地からお客が来るという。地熱の力をそのまま使うのがフラッシュ式。高温の九州に多く、別府杉乃井や霧島ホテルなどはフラッシュ式で完全地熱をやっている。バイナリーは低沸点媒体を利用して低温の蒸気・熱水を利用する方式。

土湯は日本初の水冷式バイナリーで、最高400kWを出力する。計画では350kW、月22万kWで、一般家庭の500世帯くらいを賄える。水力発電の方は一般家庭の160世帯、併せて700世帯弱。土湯は250世帯で、旅館を70世帯で計算すると770世帯分になるから、併せて千世帯、3分の2くらい賄うことができる。

将来的には水力を2つくらい作り、バイナリー、地熱、風力、太陽光、バイオマスの五大再生エネルギーを使って、エネルギーミュージアムを整備したい。廃業した旅館を利用し、ここに来たら再生可能エネルギーのこと全部学べるというようにして、大学との連携、国際交流、全国の学校、行政、企業、各界各層から人を迎え、土湯に泊まってもらえるようにしたい。バイナリー発電後の温泉水と冷却水を使ったエビなどの養殖も考えているとのこと。

次々と飛び出す加藤さんのアイディアに感嘆させられるが、実際たくさんの有名企業から資金のオファーがあったそうだ。ありがたい話ではあるが、自分達の温泉組合から 90%、NPO10%が出資して自分たちでやった。新たな事業体が必要だろうということで、株式会社元気アップ土湯、地域の街づくり組織を作ったということだった。

こんな人たちもいるという事実に大いに励まされる。大きなものに頼るのでなく、自分たちの街を大切に思う人たちが、自分たちの持つ知恵や資源を活かし、自分たちの手でできることを積み重ねていく。見習いたいものだ。

その後、また114号線を戻り、34号線に入って、南相馬を通り、「希望の牧場」を訪ねた。

＜希望の牧場＞

希望の牧場は福島第一原発から北西へ14km、双葉郡浪江町立野にある。「決死救命、団結！」とスプレーで書かれた文字や看板はかつての大学キャンパスを思い出させる。全共闘世代の文字だ。

牧場主である吉沢正巳さんは 61 歳だそうで、たくさんの写真や資料を示しながらここまでの状況について語り、牧場の牛たちを見せてくれた。

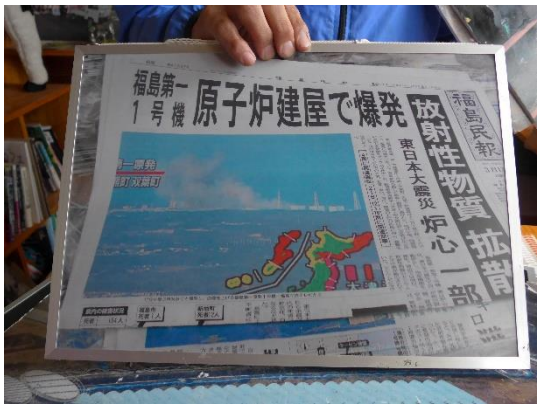
2011 年 3 月 11 日、大地震、大津波、爆発が起こったが、浪江町にはどこからも一切連絡がなかった。請戸という漁港はレスキューを断念、200 人が津波で亡くなり、600 軒の家が壊れた。海岸から 2 km くらいあった町は壊滅した。

カーナビの TV を見て（この時、福島第一原発の緊急事態宣言、半径 3 キロ圏内に避難指示、半径 3〜10 キロ圏内に屋内退避指示が報じられていた）、近所の人たちと声をかけあい、原発の反対方向、浪江町の津島地区に逃げた。寒かったので、焚火を焚いて肩を寄せ合った。3 月 14 日に 3 号機が爆発し、吉沢さんはその爆発音を聞いたという。

「これは森住さんという写真家がヘリを飛ばしてとった写真。こちらは 15 日に吹飛んだ 4 号機の写真で、海側から撮った貴重な写真もの。ひどい状態の建屋の姿ですね」

15 日、2 号機が大量の放射能を放出し、4 号機が爆発、1 号機 2 号機の放射能も合わさって、逆にそちらの方にひどいのがきていると、15 日になって初めて連絡がきた。みんな大慌てで逃げた。山を越え、二本松の東和に逃げたが、道路はそこら中壊れ、ガソリンスタンドから一斉にガソリンがなくなった。自衛隊の装甲車もきていたし、放射能化学兵器に対応する部隊も道路沿いにテントを張り野営していたが、15 日にはみんないなくなった。

これは、とうとう配ることのできなかった 13 日の新聞。みんな避難して配れなかったものが山のように残った。



会社から預かった 330 頭の牛をどうしたらいいのか、二本松のエム牧場にいる社長と相談しながら、ちょうど避難路となった 114 号線を行ったり来たりして、発電機で水をまわし、牛に水やえさをやり続けた。

3 月 17 日、一人牧場にいると、自衛隊の放水作業の噴煙が見えた。ちょうど自宅から原発が丸見えで、その噴煙を見ながら、「自衛隊のほとんどは死ぬのだろうな」と思った。ちょうどその頃、東電の社員は撤退ということで、第一原発から第二原発の方に逃げたと知って、「ふざけんな。自分たちが作ったものを制御できずに逃げ出し

て、自衛隊にやらせるなんて、ふざけんじゃねえ」と激しい怒りが沸いてきた。

その日のうちに、東電の新橋本店に乗り込んで抗議することを決め、翌 18 日に乗り込んだ。言いたかったのは二つのこと。「牛は全滅するだろう、損害賠償の裁判を必ずするから保証しろ。もうひとつは逃げんなよ。自衛隊が命を懸けて頑張っているのに、自分たちが作ったものを制御できないと逃げんなよ」。最後に対応した東電総務は泣いていた。

それから、経済産業省内の原子力安全保安院へ行った。「安全と言っていたのに、とうとう爆発したぞ。官房長官に会わせろ」。官房長官が原発爆発事象という言い方をしていて、それがどうも評論家的で責任のない言葉に聞こえた。取り次いでくれたが、「アポなしに突然というわけにいかない、出直して来い」と追われ、都合 1 週間ほど東京にいた。

エム牧場の社長は、東電に乗り込んだ 18 日に、牛舎においておけば全滅するからと、牛を全部放してしまっていた。社長のところに行き、「見捨てられないんだ。えさ運ぼう」と、3 月 23 日から、社長と一緒に、3 日に 1 回、フレコンバックに入った豆の搾りかすなどを運び込み、さっと帰るということをしていた。

そうこうしながらも、よその牛舎が気になった。どんどん牛が死んで、全滅していった。牛の死骸がそこら中にあった。「これは牛たちがえさを待っている写真。これは殺した牛を埋めた穴。茶色のは全部蛆。隣はこういう状態でした。すべて原発の爆発ということですけど」。

それを見て、「牛飼いとしてこういうことはしないでおこう。自分たちで飼ってきた牛を牛舎の中でこんなふうにするなんて」と考えた。それで、みんなとは逆の判断、逆の行動をとった。生かそう、見捨てられない。

5 月 12 日、国は、警戒区域に生き残った家畜を全部殺処分すると決め、殺処分が始まった。片端から豚を捕まえては虐殺していた。犬猫ペットについてはレスキューを認め、支援団体がえさを運んだりしていたが、家畜はだめだということに納得がいかなかった。

4 月 22 日、原発半径 20 キロ圏内が警戒区域に指定されてから、全部封鎖されたが、バリケードを乗り越えてえさを運んでいた。警察に捕まって始末書を書かされたことも度々あった。

浪江町の仲間の牛たちの写真が、フライデーに載った。やむを得なかったと思う。津波の現場にも助けに行くことができなかった。原発が爆発したからどうしようもなかったと思う。ほとんどの業者は殺処分に同意するしかなかった。

ただ、自分たちは逆の方向に行こうと思った。

吉沢さんたちは、「希望の牧場ふくしま」というプロジェクトを作って、被曝を調べようとしてきた。今、20 頭ほどにカネボウ化粧品のような白斑現象が出ている。専門家に来てもらったが、「病気ではないようだが、色素が変わっている。わからない」と言われた。農林水産省の大臣に調べて欲しいと申し入れし、血液中の微量成分、銅が極端に不足していることはわかったが、模様については結局わかりませんということで終わった。

子どもたちの甲状腺についても国は因果関係わからないと言っている。研究者が毎月のように来るが、被曝の影響だと論じることには勇気がいる。福島の復興を妨害する風評を立てるなと統制抑圧がかかる。5 年かけて牛を生かしてきたが、10 年かけて徹底的に因果関係を問い続けていきたいと思っている。

去年の 6 月 20 日、農水省の玄関口に白斑模様の牛を連れて行った。日比谷図書館で警官ともみあいになったが、本気になって迫っていきたい。国は今、再稼働に向けてまっしぐら。川内原発も再稼働でトラブル、桜島も怒り狂っている。

渋谷で 120 回にわたる街頭演説を続けているが、あたりは福島の電気で非常に明るい。新宿、渋谷を 24 時間眠らない都市にするために、今、山手線の工事している。東京首都圏 3 分の 1 は福島の電気。そして自分たちには帰る場所がない。

放射線で真赤な地区は山間部。機械も人も入れないから、除染できない。そこに水源があって使えない。請戸の漁港ももう二度と漁はできない。幼稚園、小中高、みんな廃校になり、浪江町小学校は全国 50 ヶ所に散らばった。

双葉町、大熊町に中間貯蔵地はできない。土地を売った人は 2300 人中まだ 5 人で、半分は行方知れず、用地交渉もできない。土地の値段も事故によって評価が低くなっているから売らない。処分所などできず、あちこちに仮置されているフレコンバックがそのまま残る。10 年、20 年とそっくりそこに残ると思う。あちこちで膨大な予算をかけてかき集め、袋詰めして積み上げ、

そんな状態で避難指示を解除しようとしている。

楢葉町は 9 月 10 日。来年の 4 月 1 日は尾高区解除で、小中学校は授業を再開と言っている。賠償の打ち切り、6 年、7 年経って、国ももうおしまいにしようとしている。そして、この地域は放射能と妥協しながらあきらめようとしている。

馬場町長は浪江を「流浪の街」と表現した。根なし草のジプシー。浪江町の人たちは、たいがい 7 回も 8 回もあちこち行っている。浪江町役場も 4 回移転している。みんな帰らないだろう。子育て世代は帰らない。帰るのは 2 万人の 1 割、高齢者だけ。仮設暮らしで疲れた人が放射能と妥協する。「2 マイクロシーベルトあるけど、そのくらいいいだろう」と妥協する。そして、いずれお迎えがくる。浪江町はチェルノブイリのようになる。

浪江町の震災関連死はもう 400 人近くなっている。津波で 200 人死んで、そのうえに 400 人。避難民がアンケートに「生きていたくない」と書く。自殺者が何人も続き、浪江の津島では、刺身包丁で腹を切った人がいる。どんな気持ちだったか。これはまさに棄民だ。

浜通りの電気によって関東が成り立っている。栃木県、埼玉県、東京の電気を新潟、福島、青森の電気が支える。大間原発も建設中。危険なものが貧しい地方に集中的に作られ、事故が起きればこんなことになる。

東京電力は、第一原発を作る時、もう 10 m高くする予定だったが、原子炉を冷却する海水をくみ上げる電気代がかかりすぎるからと落差を下げた。当初から経済コストを最優先する発電するシステムだった。想定外という話を事故当時は信じていたが、予定より 10m下げたと知って、「俺たちは何だよ」と憤りを感じた。これは人災。人間の判断によってこの事故が起きた。絶対安全という国や電力会社の話はもともと信用していなかったが、よりいっそう深く疑うようになった。

吉沢さんは、渋谷で言うそうだ。3.11 は終わっていない。また近いうちに地震とか津波がある。あちこちで地震が起こっている。ついこの前も、小笠原で海底深い地震があった。浅いところだったら同程度の津波だった。人は、自分には起こらないだろうという願望のもとで生きているが、2020 年にオリンピックをやろうとしたら、実は東京直下の大地震だったなんてことがあるかもしれない。火山の噴火、予兆がそこら中にある。そういうなかで原発が安全なんてはずがない。

ドイツ、イタリア、スイスもやめようとしている。ドイツの TV 局が何度も来て、「日本はどうして大人しく何も言わないのか」と聞いてくる。いろいろ考えてみたが、究極はドイツ国民と日本国民の実力の違い。日本は熱しやすくさめやすい、忘れやすく騙されやすく、最後には「まっいいか」みたいな、あきらめる性分の国民だとつくづく思う。

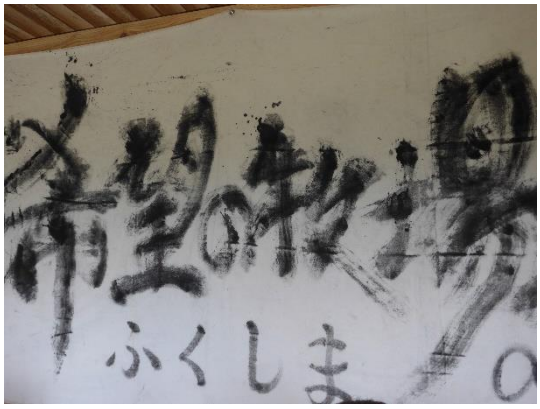
でもドイツでできることが日本でなぜできないのか、やる気の問題は大きい。ソーラーシステムは全国あちこちでやられている。自分たち避難民こそ声をあげていかなければいけない。原発の時代を終わらせなければいけない。渋谷の雑踏で、スクランブル交差点 30 万の人が通る。右翼団

体の街宣よりも大きな声で語る。今も１万円札を募金箱入れてくれる人がいる。眼が合うと、こちらの言っていることが入っているのがわかる。明日は我が身かもしれない。

浪江町には発電所がない。浜通りは関東の電気供給基地で、原発を引っ張ってきて仕事ができ、そこに夢をもった時代もあった。でも、こういう事故があって、ぜんぶパーになった。そして未来がない。避難しながら、かつての絆を断ち切られ、散り散りになっている。2 万人の 3 分の 1、約 7 千人は他県に避難している。県内もあちこち。福島、いわき、南相馬、復興住宅が間に合っていない。おそらくオリンピック準備のためにお金も人も東京に行く。

実は、浪江には発電所がない。吉沢さんたちが、ずっと尾高・浪江の原発反対をやって作らせなかった。

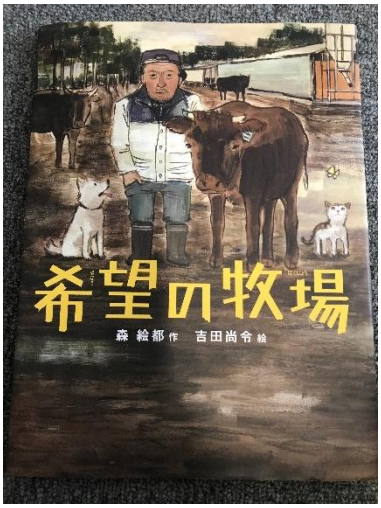
「たった 2 人が反対して白紙になった。ところが隣の原発が浪江をぶったぎっている。僕らの場所は絶望的な場所。何の希望もない。ここに『希望の牧場』と書いてくれた人があった。悔しくないか。希望は自らが行動してつくらなければならない。絶望状態では心が折れてしまう。どんなにひどい場所でも、330 頭の命がある。人間はどんなふうに命を扱ってきたのか。売れない牛を飼うこと自体悩むが、でも、行動あるところに道は作られるだろう。事故にあったけれど、ひとつのチャンスが来ているともいえる。今 61 歳、人生残り 20 年かけて原発を終わりにする。叶わなくても、語り部とかアジテーターをやっていきたい」。吉沢さんは時にユーモアを交えながら熱く語る。

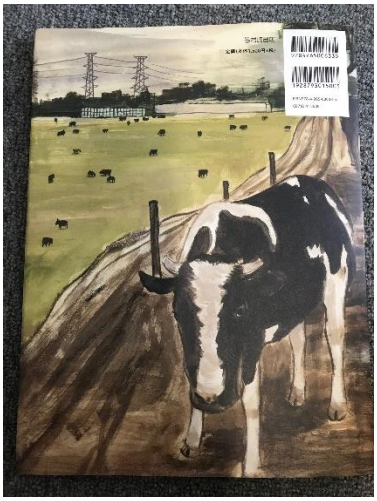


「原発一揆」だと言って、警戒地区に留まり 330 頭の牛の世話をし続けているという吉沢正巳さんのことを、私は、2012 年に出版された『原発一揆』（針谷勉著、サイゾー）で知り、2014 年に発行された絵本『希望の牧場』（森絵宮古作、吉田尚令絵、岩崎書店）、2015 年 3 月に出版された『牛と土～福島、3.11 その後』（眞並恭介著、集英社）など追っていた。

吉沢さんの父親は、満蒙開拓団として中国東北部に入植したが、関東軍に捨て置かれ、シベリアに抑留された。3 年後、父親は戻ってきたが、国は何もしてくれなかった。これは、棄民である、これは今回の原発事故と同じだと思った。すべてを失って戻ってきた父親は、千葉で開墾を始め、その土地を売って手に入れた山林の一部が希望の牧場だという。そして、吉沢さんは、実は、関東軍が逃げ出した後、父親が自分の母と子どもたちを自分の手で殺めたという衝撃的な事実をずいぶん後になって母親から聞かされる。

敗戦後の混乱のなか、自分の手で家族を殺めたという話は私も複数聞いている。そして、そんな地獄のような苦しみの中から何が生まれてきたのかについて、虐待やDV、性暴力に関わる臨床心理士として関心を持ってきたのだ。それは、ここでは、こんな形で希望の灯を燃やし続けるエネルギーとなっている。





希望の牧場は、浪江町と南相馬の境界線上にある。2012 年の警戒区域の再編成で南相馬側が解除になり、牧場入り口がたまたま南相馬側にあったため、出入り可能となった。牧場の大半が浪江にあるため、行政は入り口にバリケードを置こうとしたが、激しく抗議して撤回させたそうである。南相馬にかかっていたからこそ、早い段階で、電気を引き、電気牧柵で牛たちを囲い込むこともできた。これが、「命の境界線」の意味である。20 キロ圏内で引いた「命の境界線」は、希望の牧場の牛たちだけでなく、人の命にも他の動物の命にも致命的な影響を及ぼしたはずだ。

希望の牧場入り口近くには、浪江町の境界上にバリケードがあった。バリケード前で試しに線量を測ってみると、0.53μSv/h。

「除染作業中」の文字がなんだか滑稽に見えてくる。「みんなと真逆の道を行く」と決めた人たちの存在は、たしかに希望である。同じ所で同じことはできないとしても、自分のいる場所で、命の抵抗にささやかに連なりたいと思う。

つづく